

## グローバリズムと ロータリー

成田空港南 鈴木 匡哉

二〇一六年規定審議会で、例会開催を少なくとも月二回とする「クラブ例会と出席に柔軟性を認める件」や「会員身分に柔軟性を認める件」について、当初私は、例会を減らせば浮いた例会費を奉仕活動に充てられるし、入会資格の要件が緩和されれば会員増強にもつながるので良いことだ、と思っていました。しかし「今回の決定はロータリーの精神に反し、受け入れ難い」という意見が、特にロータリー歴の長い会員諸兄に根強いことを、地区セミナーなどで感じました。

ロータリーの精神とはすなわち国際ロータリー(RI)が適法に議決したもので、それを否定することこそロータリーの精神に反するの

ではないか、と私は考えてきましたし、デイスカッションの場で「その考え方はRIの方針なのか、個人的なものなのかをまず明確にしてください」などと生意気な発言もしてきました。しかし、アメリカのドナルド・トランプ大統領が誕生したのをきっかけに、考え方が少し変化してきました。

アメリカ国民がトランプ大統領を選じたのは、行き過ぎたグローバリズムに嫌気が差したのが理由だと考えます。アメリカは大統領就任式で聖書に宣誓する、まじ紉うことなきキリスト教国ですが、多民族・多宗教化のグローバリズムの中、シヨッピングセンターからクリスマスツリーが消え、「メリー・クリスマス」は「ハッピー・ホリデー」と言い換えるのが近年、ポリティカル・コレクトネス(政治的公平)とされています。アイデンティティーとも言えるキリスト教文化を封印しなければならぬような状況に耐え切れなくなっていた多くのアメリカ人の心に、トランプ氏の幾つかの発言は深く響いたことでしょう。

翻って今回の決定について考えると、RIは会員増強を目的に規制緩和で会員の多様性を受け入れる、すなわちグローバリズムに舵を切ったと言えるのではないのでしょうか。結果、RIは間違いなく何らかの変化を遂げることになるでしょう。しかし、ブレグジット(イギリスのEU脱退)やトランプ大統領の誕生が行き過ぎたグローバリズムに対する揺り戻し現象であるとするれば、これと同じことがRIにも起こる可能性は十分に考えられます。それならば、いかにRIの決定といえども「ロータリーの精神」

に照らして批判的に受け止める姿勢は健全と言えそうですが、一方で、行き過ぎればRIのガバナンスを乱す危険も否定できません。

では、ロータリー歴五年を迎える私が成すべきことは何なのか。それはロータリアンとして恥ずかしくない意見を形成する裏付けとなる、ロータリー・リテラシーの向上だと感じています。  
(第二七九〇地区 千葉県 IT関連)